



The flog in the well

壮行会は終わりを迎え、勇者とその母は抱擁を交わした。

「行ってらっしゃい。外の世界ではくれぐれも気をつけるのよ」

「心配するなよ母さん。外の世界なんてきっとたいしたことないさ」

勇者と呼ばれたその男は、その長い足で軽くジャンプをしたあと、じゃあなと言い残してその場を去った。彼は下りてきた桶の裏に張り付くと、桶とともに上昇し、やがて見えなくなった。

桶を引き上げた少女は、裏にくっついていたので見つけると「嫌ね」と顔をしかめた。そしてそれをがっしり掴むと、近くの止まり木に止まっていた鷹にそれを差し出した。

「さ、今日はごちそうよ。その分今日は張り切って働くのよ」

鷹匠は鷹がカエルをくわえたのを確認すると、汲み上げた水を取りに井戸へと戻っていった。

ロケット

私を含む二十人の隊員は、出発予定時間を十分遅れて態勢を整え終えた。さっきから緊張していた空気がさらに張り詰めた。ここは今年新しくできた大規模なロケット発射基地の発射台。隊員二十名がそこにセットされた超高性能ロケットに乗り組んでいる。私達が宇宙に行く目的は、月に地球人の月調査基地を造ることだ。つまり、我々は初めてこの基地から飛び立つ人間であり、初めて月に建造物を建てる人間なのだ。たくさんの荷物と人員を乗せたこのロケットは、さっきエンジンに見つかった不具合の微調整を終え、ようやく宇宙へ飛び立とうとしている。

私はさっきから人並み以上に緊張していた。この不安な気持ちは、ここにいる乗組員の誰一人さえ経験したことがないだろう。出発を前にしてさらに大きな波を伴った不安は、今にも私を丸呑みにしてしまいそうだった。この不安を和らげるにはみんなにそれを話すしかない私の直感が指示した。ここまで大きな不安でも、二十人で分割すればずいぶん楽になるだろう。早々からみんなに少しでも不安を持たせるのは申し訳ないが、許してくれ。そう決心すると、私はこの緊張感のなかでゆっくりと口を開いた。

「あのさ」

席についてじっと一点を見ていた隊員達が一斉にこっちを見た。その威圧感から、私は口を開けたまま黙ってしまった。

「いやいや、そこは話してくれよ」

「ちょうどこのぴりぴりした空気が嫌になったところなんだよ」

「ごちないにしろ、さっきとは違い笑みを含んだ隊員の顔に押されて私は再び声を発した。

「いや、実はさ、今朝夢を見てさ――」

「あ、俺も見た！　でさ、俺の夢はさ」

割り込んできた男。こいつは訓練所時代からずっと声が大きくて、言わばムードメーカー的な存在だった。そういえば、さっきまでなんでこいつから何も話さなかったんだらう。無言に覆われた空気が一番嫌いなのは、こいつのはずなのに。そう考えている間にもやつのは話は進んでいた。まあ、こいつの話でも聞いて気を紛らわそうか。やつは大声で話を進めていた。

「俺は整備士になっていたわけよ、このロケットの。でさ、出発直前までエンジンの点検をしていたらさ、あれ、なんか変だなと思って。電気のコードがうまくくっついてなかったというか、あれだ、接触不良になっててさ」

エンジンの点検場所と言えば、発射台の真下にある凹みのことだ。この基地特有のもので、凹みの深さはビルの十階に相当するとか。そこから出入りするには、壁にある三つのドアの中の一つからでないといけない。窪みの中に階段などを設置すると、真上のエンジンから出る炎で壊れてしまう。

「で、直すからちょっと発射を遅らせてくれ、って仲間に言ったんだ。で、直し終わって外に出ようとしたらさ、ドアが開かないんだよ。仲間が言い忘れてたのかな。発射三分前の態勢になっててさ。エンジンからの噴射熱にそなえてドアが嚴重にロックされちゃったんだ。開けろ！　って何度も叫んだよ」

「で？」

隊員はやつに面白いオチを期待してか、物語のエンディングを早く言えと急かしはじめた。しかしヤツは言った。

「俺さ、助けられずにドアを叩きながら焼け死んでしまった」

急に辺りがしんとした。やがて

「なんだよ、怖さ倍増だよ」

と誰かが言って、またロケットの中はざわつきはじめた。

「で、お前の夢はなんだったんだよ」

隣の席にいた男が私に聞いた。また視線が私のもとへと集まった。

「いや、実はさ」

私が話しかけたとき、指令台から発射予定時刻まで一分をきったとの連絡が入った。「お前の話はまたあとでな」と言って隊員達はまた前を向き、発射の衝撃に備えた。やがて、小さい頃から生で聞くことを夢見てきたカウントダウンが流れ、ゼロの直後のGは私の心拍数を大きく上げた。まだろくに自分の不安が解消されていないで発射に踏み切ったロケットは、何事もなかったかのようにただ速力を上げていき、やがて私達は無重力に身体を弄ばれ始めた。

「成功」

その言葉に私達は狂喜した。なんだ、私の不安は杞憂だったか。もっと発射の瞬間を落ち着いた状態で迎えたかったな。みんなとハイタッチを交わした私は、直後の本部からの連絡を夢見心地で聞いた。

「だが、出発に際して一名の命を失った」

また船内の空気が凍り付いた。

「ロケットの整備士だ。エンジンの点検所に取り残されて、あの凹みの中で焼け死んでいた」

ヤツの夢は正夢となった。我々は一先ず冥福を祈るようにと言われた。隊員らはしばらくの間ヤツと話していたようだったが、やがて静かに手を合わせ、整備士に黙祷を捧げた。やがて私の異変に気づいた隣に座る隊員が、私の肩を揺さぶりながら

「おい、お前。黙祷していないと思ったら、顔が真っ青だぞ。大丈夫か」

そんな言葉ももはや耳に届かなかった。このロケットが発射直後にエンジントラブルで事故を起こし、墜落する夢を見たなんて、言えるわけがなかった。

自由裁量

宅配ピザ屋の一室。目の前の電話が鳴った。受話器をあげて

「はいこちら宅配ピザのー」

『知ってます』

「……はい」

『うん』

「……では、ご注文を承りま」

『自由裁量で』

「は」

『いや、ですから、《自由裁量》で』

「……はあ」

『うん』

「では、おまかせということでよろしいでしょうか」

『それも、自由裁量でー』

「ええっと！……それはつまり、勝手に決めろ、と」

『解釈の方も、自由裁ー』

「はい、はいはいはいはい！わかりました！」

『あんた大丈夫？ 熱でもあんの』

「あ、いえ、ちょっとはらわたが煮えてきた程度です」

『それ、ピザにのっけないでね』

「は」

『はらわた、ってやつ』

「……はい。では、ピザの大きさは30cmと25cmの中からお選びくださ」

『ああ、それも』

「『自由裁量で』」

『……ぬおっ？』

「は一いかしこまりましたー」

『あんた大丈夫？ 職場の環境があんたをおかしくしてるの？』

「いえいえ、当社はれっきとした優良企業です」

『それを決めるのはそっちの自由裁量だけどさ』

「で？」

『は？』

「お飲みものをお付けいたしましょうか」

『それは……』

「自由裁量で」

『は？』

「……は」

『いやいや、飲み物を付けるかどうかは、こっちの自由裁量だろ』

「はあ」

『じゃ、オレンジジュース』

「誠に申し訳ございませんが、宅配するかはこちらの自由裁量なので」

受話器を置く。なに、あんな客の一人や二人、失ったところでどうにもならない。ほら、また電話が鳴った。次はまともな客であってほしいものだ。受話器をあげて

「はいこちら宅配ピザのー」

『知っている』

「は」

『さきほどの接客対応、はらわたが煮え繰り返ったよ』

「あの、さっきの続きならやめてください。警察に通報し」

『誤解しているようだね』

「……は」

『私は本社の者だよ。君の接客対応を見せてもらったが、あれではあまりにふさわしくない。君は本日づけでクビだ』

「いやいや、しかしこれはひどい」

『口答えするな。君をクビにするかどうかは、こっちの自由裁量だ』

<http://p.booklog.jp/book/76844>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76844>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76844>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

小さな反抗、犯行。